新交響楽協会

第一回

合同演奏会

AUGUST 1, 1966　東京文化会館大ホール



御　挨　拶

新交響楽協会設立にあたり，一言御挨拶申しあげます。

私たちは昭和30年２月，東京労音の自主的な演奏サークル「労音アンサンブル」として発足し，一年後に芥川也寸志を指揮者に迎え，名称も「東京労音新交響楽団」と改め，団員の自主的な運営により東京労音の運動の一環として活動してきました。

発足以来，順調に発展してきましたが，入団員が増えるにつれて団の質的向上と量的拡大との間に矛盾が現われ，その打開策を団員たちの間で一年余りにわたって検討した結果，団員の技術レベルに応じて組み分けするのが最も妥当であるとの結論に達し，全団員が二つのグループにわかれ，その体制の下で昭和36年からあらたな活動に入りました。この結果60余名であった団員は200余名となり，２年目にして三つのオーケストラを編成するまでになり，この間に吹奏楽団も発足，独自の活動を始めました。

今日に至るまで三つのオーケストラと吹奏楽団は，自主的な運営を行いつつそれぞれ団の内容にふさわしい活動方針を立て，活発な運動を続けてきました。東京労音はじめ各地労音の例会に，音楽教室やうたごえ祭典に，そのほか文化的な集会などに参加しつつこれと平行して団独自の企画による演奏会を持ち，労音会員のみならず広く一般に＜新響＞の名で親しまれてきました。

新響四楽団の，団員互選によって選ばれた委員，指揮者，及び東京労音運営委員の構成する新響運営委員会は，全楽団を統括しつつ新響の運営にあたってきたのでありますが，このたび「新響の体質改善とその活動方針を，より労音運動の方向に近づけるために」という名目の下に，芥川也寸志，岡田和夫両指揮者の解任を含む新響改革案が東京労音運営委員会より出され，この問題についての討論が全団で三ケ月間にわたって行われました。

しかし最終的には新響団員の声は聞き入れられず，東京労音運営委員会はただ提案に全面的に賛成する者以外は労音のサークル団員としてふさわしくない，との態度を一貫して変えなかったため，この問題に決着をつけ，新響の歴史を生かし，これを更に発展させるために私達は３月15日東京労音より独立し「新交響楽協会」を設立したのであります。

その後３月18日に発表された東京労音の統一見解は，この問題の持つ内容と新響の実態を正しくつかんでおらず，私たちはあらためてこのような誤った観念のもとに新響への問題提起と指導を，東京労音運営委員会が行ってきたことを非常に残念に思います。特に統一見解の中に，指揮者芥川也寸志氏が団の運営の主導権を握り新響を私物化していた，との言は全く事実に反し，団員各自が委員会を中心に自分達のために，新響の発展のために，そして音楽愛好家のためにと，仕事や勉学にはげむかたわら，自主的に活動してきたのであります。

私たちは，新響に対する東京労音提案，更に３月15日東京労音より離れるに至った過程の底流にある，東京労音の音楽及び音楽運動に対する考え方と，解任された両指揮者及び大多数の団員たちの考え方とが，根本的に喰い違っている点を見逃すわけにはいきません。

私たちは，今日私たちがおかれている，政治的，社会的状況に決して無関心でいるわけではありません。しかし特定の政治的課題を音楽的課題に優先させるとしたら，それは音楽を手段とする政治運動となり，広汎な階層を対象とする健全な音楽運動としての発展は望めなくなってしまいます。私たちは，新交響楽協会を設立するに至った３月15日の教訓に学び，今後も団員の資格は一切問わず，だれでもいつでも入団出来て広汎な階層から親しまれる団体となれるように，十年間の貴重な経験と歴史を生かしていきたいと思っております。

アマチュアのオーケストラが自立して活動することの難しさは，私たちにもよく分っております。しかし，私たちは常に技術的向上と組織的拡大を目指して，新しい音楽的可能性への追求を続けていくと同時に，他の民主的な文化団体とも交流し，協力して，社会的役割をも果していくのが音楽運動本来の姿であると考え，どんな困難があろうとも今後もこの理想を高く掲げて活発な活動を続けていく覚悟でおります。

どうかこれからも私たちの活動に御注目いただき，変らぬ御批判，御鞭撻を賜わりたく，ここに御挨拶申しあげる次第であります。

１９６６年８月１日

新交響楽協会

PROGRAMME

1. シンフォニック・プレリュード …… アルフレッド・リード

2. 日本の若人の踊り …… 陶野重雄

3. バレエ組曲「パリのよろこび」 …… オッフェンバック

1) 序曲　2) ワルツ　3) ギャロップ　4) ワルツ　5) フィナーレ

指揮　村方千之

吹奏楽　新交響吹奏楽団

4. 歌劇「アウリスのイフゲニア」序曲 …… グルック

5. 交響詩「フィンランディア」 …… シベリウス

指揮　岡田和夫

管弦楽　新日本交響楽団

6. 交響曲 第6番 ヘ長調「田園」作品68 …… ベートーヴェン

1) 田舎に着いたときの愉快な感情のめざめ：速く但し控え目に
2) 小川のほとり：遅めに感動を以って
3) 田舎の人々の楽しい集い：速く
4) 雷雨，嵐：速く
5) 羊飼の歌，嵐のあとの神への感謝：少し速く

指揮　芥川也寸志

管弦楽　新交響楽団

「新　響」へ　の　期　待

木　村　重　雄

ぼくが「新交響楽団」というオーケストラの存在を知ったのは，1958年秋のことでした。プログラムに，なにかを書くようにたのまれ，折悪しく演奏会がなかったために指揮者の芥川さんや，そのほか何人かのプレーヤーのひとたちと会って，いろいろはなしをうかがったのが，このオーケストラを知るきっかけになったのです。そして，その後，何回か演奏をきいたり，パンフレットに原稿を書いたりして，とも角このオーケストラが健全な歩みを，着実につづけていることが，その都度わかり，ひそかにたのもしく思ったりしていたものです。それだけに，1966年春の「東京労音」との問題は，おどろかされました。そして，スポンサーをもって自認していたらしい「東京労音」が，このオーケストラについて，なにも知らなかったのには，おどろかされました。もともと，たとえば「都響」をもとうとした東京都にしても，ただ，オーケストラをつくりたい，それには自分たちが経済的な支柱をつくる，だからお前たちプレーヤーは良い演奏をしてくれ，というつじつまのあわぬ論理によって，ひとつのオーケストラが自分たちの思うように動くと，ごく単純に信じ切ってしまう。東京都のお役人にしても，「東京労音」の運営委員会にしても，音楽のことも，どうしたらよい音楽ができるのかも，プレーヤーがどのような気持ちでオーケストラに加わっているのかも，全くご存知がない。しかも，それでいながら，いや，それだからこそそうなのでしょうが，これだけ苦心をして予算までとって支持しているのに，プレーヤーが言うことをきかないのはなにごとであるか，と考えたりするしまつ。それを，いちがいに「独断的」などという図式で非難しようとは思いませんが，しかし知らないことを，自分勝手な判断で解決しようとするのは，なにごとによらず，危険きわまりないことです。いちばん悲しむべきことは，「東京労音」のなかに，音楽を事務的に処理したことのあるひとはいたのでしょうが，音楽を体験したひとがいなかったことです。あるいは，それもいたかも知れませんが，結論として，そううけとられてもしかたのないような答えしか，出せなかったことです。「音楽を愛する」ということは，いろいろとやり方はあるにしても，まずそれぞれが音楽を楽しんでいる，その楽しみ方を重んじることです。音楽には，ひとつの楽しみ方しか無いわけではない。要するに，ひとりひとりが，自分なりの楽しみ方によって，音楽とふれあう。しかし，音楽好きがすばらしいのは，全くちがう方法で，別々なところで，自分なりに楽しんできた音楽が，すくなくも「好きである」ということで，誰とでも親しめてしまうことでしょう。つまり，はじめて会ったひととでも，音楽を通じて，はなしができる。特に，一緒になって演奏し，ひとつのものをつくり上げようとするとき，日常的なすべてのゆきがかりをわすれて，ひとつの目的に結びついてしまう。そこが，オーケストラで演奏することの，もっとも大きな収獲といえるでしょう。その一緒に演奏してゆく過程で，もし協調できないひとがいたとすれば，それはむしろ音楽の問題よりも，人間の問題

となる。つまり，ひとつの社会を協同してつくり出し，よりよいものへと発展させるための条件が，欠けているひととみられても，しかたがありません。いやしくも「音楽」を標榜する「東京労音」が，そうした人間と社会の結びつきの基本を，オーケストラのなかにみつけることができず，ただ自分たちの意見によって，組織を変えさせようとしたことは，残念なことです。「音楽を愛するということ」「オーケストラで演奏するのが好きだということ」このふたつに対する理解の無さが，あの事件を生み出した原因であるのは，まちがいありません。

そして，一方「新響」の方は，そうしたいざこざにすこしもわづらわされず——ということでも，決して無かったのでしょうが，しかし結果的には自分たちのペースを着実にまもって，4月4日に予定通り第9回定期演奏会を実行している。この演奏会でひしひしと感じられたのは，プレーヤーが自分たちが演奏を楽しみ，同時にその「音楽する楽しみ」を，きき手にもとけこませようとしていることでした。しかも，日本のオーケストラ音楽を代表する作品でありながら，最近ではどのプロ・オーケストラもとり上げたことの無い伊福部昭の≪交響譚詩≫を演奏して，決してただありきたりの名曲を選び，それによって自己満足しようとしているのではない積極的な姿勢をしめしたことです。こうした日本人の作品をとり上げることは，モットーとして一応誰しも考えるにちがいありませんが，現実的にはたいへん多くの負担をともないやすい。はやいはなし，切符の売れ行きにしても名曲がひとつあればちがってくるし，演奏する側も広く親しまれている作品の方が，練習もしやすい。それに，ベートーヴェンなら著作権料を支払わなくてもすむし，楽譜も簡単に手に入るが，伊福部昭となると全く逆です。しかし，それでも日本人の作品をとり上げる必要はあるので，なぜなら≪交響譚詩≫がそうであるように，良いオーケストラ音楽はすくなくないし，自分達の決定的なレパートリーとして組みこめる。それに，日本の創作とも，これからかかわることができるでしょうし，「新響」のファンに目をみひらかせることにもなる。あれだけの混乱のなかで，かつ冷静にこうした作品を選び，おそらく相当の練習を重ね，演奏会に出したことは，高く評価されることです。そして，ほかの作品の演奏をもふくめて，この音楽会でつよく感じたのは，「新響」のプレーヤーたちが，結成いらいのつよい音楽に対する愛情を，いまもなおもちつづけていることでした。10年目にめぐりあったひとつの試練をたくましくものりこえて自立した「新響」はさらに秋のベートーヴェン・チクルスを皮切りに，また新らしい創造を，いとなみつづけ，日本に「音楽する楽しみ」をうえつけるための，大きな役割をなしとげてくれるにちがいありません。

（音楽評論家）

曲　目　解　説

シンフォニック・プレリュード …… リード作曲

リードはミシガン州立大学の作曲と音楽理論の主任教授で吹奏楽のための作品をたくさん書いています。彼の作曲の特徴は近代的な部厚いハーモニーの上に，柔かい美しい旋律をのせて，エレガントで華麗な雰囲気を盛りあげるといったものです。このシンフォニック・プレリュードは最も良く演奏される彼の代表作品で，昨年の全日本吹奏楽コンクールの課題曲にもえらばれました。

やわらかい木管楽器のピアニシモに始まり，つつしみ深くなだらかに，次第に厚みを加えながらクライマックスへと盛りあがる。ここで今まで抑えられていた金管楽器の参加を得てすべての楽器が最高に力強くひびきわたる。また次第になだらかにカーブをえがきながら終曲へと導かれ，消えるように終るピラミッド型に構成されたシンフォニックで色彩ゆたかな美しい前奏曲です。

日本の若人の踊り …… 陶野重雄作曲

去年の秋，有名なアメリカの吹奏楽の作曲家ポール・ヨーダーが来日して，日本のバンドの演奏を五十数回もきいて帰りました。その時彼が一番おどろいたことは，演奏される曲がアメリカのものばかりで，日本のものがほとんど聞けなかったことだそうです。ヨーダー氏に指摘されるまでもなくわたくしたちは，日本人である以上日本人の作曲家による作品をできるだけ取りあげて演奏したい意欲は大いにあるのですが，残念ながら，日本ではオリジナルの良い曲がほとんど出版されていません。この「日本の若人の踊り」は極めて少ない日本人作曲家による吹奏楽の作品の一つです。しかし，これも実は日本で出版されたものではありません，アメリカ空軍バンドの指揮者，ハワード大佐が，レパートリーとして取あげて有名になり，アメリカの出版社から発売されました。そしてアメリカの吹奏楽作曲コンクールで一等賞を得ました。やはりこの曲はアメリカやイギリスの曲とは違って，わたくしたちにピッタリとくる旋律とリズムがあり，演奏していて，力強い感動を受けます。このような立派な日本人の作品が，どしどし日本で出版され，演奏されることを，願ってやみません。

なお作曲者の陶野氏は，現在ＮＨＫその他でテレビに放送に御活躍中です。

バレエ組曲「パリのよろこび」… オッフェンバック作曲

オッフェンバックといえばみなさん御存知の「天国と地獄」の作曲家です。この「パリのよろこび」は彼の数多いオペレッタのなかから美しい旋律をえらんで，バレエ組曲にしたものです。約100年前にパリで書かれたものですが，いつきいても新鮮で楽しさがいっぱい，時には浮きたつようなよろこびにあふれ，また時には優雅な美しさにみちています。

この組曲は，五つの楽章からなっていて，最初は二拍子の速い序曲で，楽しいふんい気を盛りあげ，次はエレガントなワルツ，三番目はギャロップ，ウキウキした楽しい旋律，軽快なリズム，四番目はまたワルツ，どこかできいたなつかしいメロディーです。さて，フィナーレは，赤，青，緑，いろとりどりの衣裳をつけた踊り子たちが舞台いっぱいにはねまわります。メロディーはおなじみの「カンカン」。さあ，おしまいまでごゆっくりお楽しみ下さい。　　（小野憲一）

歌劇「アウリスのイフゲニア」序曲 …… グルック作曲

この序曲はギリシヤ神話中，最も有名な「トロイ戦争」に於る逸話によって書かれた歌劇「アウリスのイフゲニア」のために作られ，神話では「イフゲニアの父アガメムノンを総大将とするギリシヤ軍はトロイにせめ入るため，アウリス港に勢揃いしていた。ところがたまたまアガメムノンが猟をした際に月の女神ディアナに捧げてあった牡鹿を殺してしまったため，ディアナの怒りに触れ，女神の起した逆風のため出帆が妨げられた。予言者の占いにより，イフゲニアが生贄として捧げられることになった。しかし女神はイフゲニアを不憫に思い，自分の神殿の女祭司として仕えさせた」。となっているが，台本作者ルーレは最後をイフゲニアとアキレスとが結婚し，人々が歌う喜びの合唱により曲を結んでいる。現在ではほとんど上演されず，ワーグナーの編曲したこの序曲のみが交響楽団の重要なレパートリーの一つとして，演奏されている。

序奏のアンダンテでは娘を生贄として捧げねばならないアガメムノンの苦しみを表わし弦楽器によって奏される。続いてグラーヴェに転じ，予言者カルカスの絶対の命令を表わす荘重な部分が高らかに示され，士気を鼓舞する様な主部のアレグロ・マエストーソに流れ込む。やがて清純なイフゲニアを表わすフルートの美しい主題が織り込まれる。突然カルカスの動機が示され曲は再び混沌としと進行する。

交響詩「フィンランディア」 …… シベリウス作曲

シベリウスの全作品の中で最も広く親しまれている曲

である。フィンランディアとはいうまでもなく，シベリウスの生活と心の故郷フィンランドの事で，深い霧に閉ざされた無数の湖沼と森林，雪凍る原野で知られる美しい祖国の自然に対する讃歌としてこの曲を書いたのである。しかしこの曲を単なる自然描写の曲と考えるのは当っていない。長い間ロシアとスウェーデンの圧政に苦しんだ祖国の叫びを，この曲に託したわけである。この作品が書かれた当時はロシアの支配下にあった時代であり，圧倒的な迫力をもって全国民の愛国心をあおりたてたのであった。それ以来「フィンランディア」は，いわばフィンランドの国歌ともいうべき地位を占めた。しかし一方，政治的苦難の時代にあっては演奏を禁止されたこともあったのである。

曲はアンダンテ・ソステヌートの序奏に始まる。金管楽器の低音とコントラバストによる烈しい叫びに似た和音進行の後，ヘ短調の主部が木管楽器で歌われる。クラリネットの抒情的な副次主題がからみ合い，再び序奏にみられた烈しい和音進行から，アレグロ・モデラートに入る。やがてティンパニーのみを残した休止の後アレグロとなる°弦の急速な音形の後，木管が民謡風な美しい抒情にあふれた有名な主題を歌う。この部分は合唱曲にも編曲されて広く親しまれている。第一バイオリンとチェロがこれを反復してから，突然烈しい特徴的なリズムを加えてクレッシェンドし，圧政に抗する祖国の力を象徴するかの様に力強い終止をかたちづくる。(柴田　隆)

交響曲第6番ヘ長調「田園」作品68 …

…… ベートーヴェン作曲

ベートーヴェンがどれほど深く自然を愛したかは数々のエピソードと共に語り尽くされています。耳を失い，恋を失った彼をいつも慰さめてくれたのは，この田園楽響曲の完成されたウィーンの郊外にあるハイリゲンシュタットの森に代表される田園の自然でした。

この曲の題名は，ベートーベンが自分で付けたもので，楽譜はさらに“田園生活の思い出”とも書いてあるそうです。また各楽章にも，短い標題が記されています。この曲には小川のせせらぎや鳥の鳴き声（第2楽章），雷や嵐（第4楽章），牧歌（第5楽章）など多くの自然描写があるために，この曲が単なる描写の音楽であると受け取られることを恐れてベートーヴェンは“絵画よりはむしろ田園の感情をあらわしたものだ”という但し書きを付けています。

第1楽章　“田舎に着いた時の愉快な感情のめざめ”はヘ長調の軽快な2拍子で，すぐに第1バイオリンに初めの主題が出ます。これがひろがって全オーケストラに行きわたると，木管とバイオリンの対話によるつなぎを経てハ長調の第2主題に進みます。低音部と高音部に裏と表のふしがかわるがわる現われてからみ合いながら発展していきます。中間の展開部は第1主題の第2小節目のリズムを延々と繰り返しながら少しずつ気分を変えていき，やがて再現部が来て第1主題は今度はいきなり全合奏で出ます。その後は型どおり第2主題と結尾部があって終るのですが，終始うきうきとした，朗らかさにあふれた楽章です。

第2楽章　“小川のほとり”は変ロ長調8分の6拍子。その標題のように弦楽器による小川の流れを示すバックがずっと続いています。第1楽章と同じくソナタ形式で，中心となる2つの主題はいずれも第1バイオリンに現われます。この楽章の終りに鳥の鳴き声が出てくる訳ですが，始めはフルートによる夜鳴きうぐいす，それにオーボエのうずらとクラリネットのかっこうが続きます。

第3・第4・第5楽章は続けて演奏されます。まず第3楽章は“田舎の人々の楽しい集い”。ヘ長調の速い3拍子でいわゆるスケルツォと呼ばれるものです。弦楽器のせわしい動きに始まり，それに一たんけりがつくと，オーボエに新しいいなか風の，しかし軽快な旋律が出ます。これがクラリネット，ホルンに受けつがれた後，2拍子の中間部に入ります。ここは一そう土の匂いの強いまた力の入った舞曲です。スケルツォに戻りますが2度目は中途でハタと止まってそのまま低い弦楽器による遠雷に始まる第4楽章“雷雨，嵐”に続きます。第2バイオリンの不安な動きはやがて，今まで沈黙していたトロンボーンとティンパニイを加えた全オーケストラの爆発による嵐をひき起こします。次いでピッコロも加わり雷を伴った大暴風雨になります。

やがてさしもの嵐も遠のき，かすかに残る遠雷も消えてフルートのかけ橋を渡ると第5楽章“羊飼の歌，嵐の後の神への感謝”となります。クラリネットとホルンの牧笛のようなふしに導かれて始まるこのヘ長調8分の6拍子の終楽章は何とも平和でおだやかな音楽で，前の急速なヘ短調の嵐との対比が見事です。中心になる2つの主題は，共に第1バイオリンに出ますが，その始めのものは変奏曲風に何回も形を変えて繰り返されます。ホルンの牧笛がかすかに響くうちにこの美しい自然の音楽は幕となります。

(仙名　保)

委員長あいさつ

新交響楽団委員長
戸田昌広

音楽を何よりも愛し，音楽の話となると時間の過ぎるのも忘れ，楽器を持つと食事の時間も惜しむほど音に目がない連中の集りであるわが“新交響楽団”も，団員の情熱と指揮者のなみなみならぬ熱意によって10年の歴史を持つに至りました。

いかに音楽が好きとはいえ，毎週の練習のために週末の夜を長い年月にわたって犠牲にするということは大変なことでして，同僚がデイトや旅行等に出かけるのを横目で見ながら，楽器をかかえ，満員電車にゆられて練習場へ行き，そこで指揮者にしぼられるのですから好きというだけではつとまりません。

それにオーケストラは集団の活動なので，個人の身勝手なふるまいは許されませんからかなりきびしいものがあります。

仕事や勉強にはげむかたわら，自己のトレーニングをしオーケストラ活動に参加しているわけですから，団員のこの情熱はあの熱狂的なビートルズのファンにも敗けないものと思います。

今日までの活動をかえりみますと，楽しい事苦しい事が沢山ありましたが，苦しい事の方が断然多かったように思われますし，これからもそうだと思います。しかしその苦しみを乗り越えていけるのは団員の和であります。私たちは，今春，3月に労音から独立するというかってない大きな事件を経験しましたが，この時ほどこの和が，我々アマチュア団体にとっていかに大切かという事を知りました。私たちは新響から音楽のことはもちろんその他自己の成長に役立つ多くのことを活動の中から学んでおり，この魅力あふれる集団の良さを，その音楽を，多くの人々に知っていただきたいと常々考えており演奏会をとおして皆様に接し，又皆様の中から多くの人が我々の仲間に入って一諸に楽しみたいと思っております。そして私たちのような団体が沢山出来て，音楽があふれる明るい社会になるよう努力したいと考えます。

本日演奏する，新日本交響楽団，新交響吹奏楽団も，新響と同じグループで，手をとりあっていく仲間でありそれぞれが自主的に活動しておりますが，新交響楽団ともども変らぬ御支援をいただきますようお願い申しあげます。

新日本交響楽団委員長
池谷輝夫

皆様，本日はお忙しいところようこそ，第一回新交響楽協会合同演奏会においで下さいまして，ありがとうございます。団員一同心から感謝しております。

私達はアマチュアであり，音楽を演奏することに悦びをもっているものの集まりであり，常に技術の向上と組織の拡大を目指して新しい音楽性への追求を続けていくことと，他の民主的な文化団体と交流をし，協力して活動して進みゆくことを目標としています。

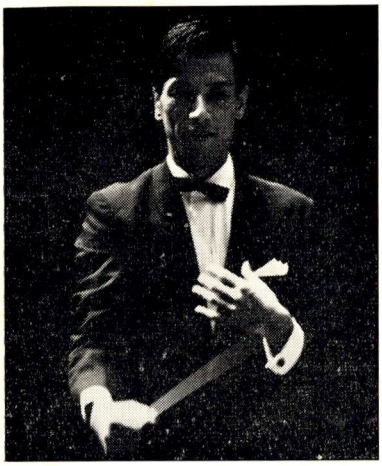
新響は10年前，東京労音の自主的演奏サークルとして生まれ，労音会員のみならず，広く一般にアマチュアオーケストラ「新響」と親しまれてきました。団員の増加にともない三つのオーケストラ及び吹奏楽団が組織され各団独自に活動してきましたが政治的及び非民主的なものを要求する東京労音に我々がついていけなかったのが当然です。そのため私達は独立し，3月15日新交響楽協会を設立しました。今回は私達が協会を設立して初めての演奏会であり，まだまだ各団とも完全なものではありませんが団員一同，一生けんめいやっております。

アマチュア演奏活動に於いてこれを支える大きなものはなんといっても私達の演奏を聴いて下さる聴衆の皆様方であります。今夜ここにおいで下さいました皆様方に厚く御礼申し上げるとともに，今後とも一層「新交響楽団」「新日本交響楽団」「新交響吹奏楽団」の新交響楽協会のトリオの御支援をお願い申しあげます。

新交響吹奏楽団委員長
赤木武志

年々音楽人口の増加とともに，今迄もっぱら鑑賞の域にとどまっていた人が，自分でも何か楽器をやってみようと思い立って，中にはかなりの年輩になってから始める人も多く，音楽教育の力入れということも加えてかなりの人が自分の生活の一部に楽器をとりいれてきたようですし，欧米なみに家族でアンサンブルを楽しむという家庭も近い将来多くなりそうで，大変うれしい事だと思います。

現在，吹奏楽は他の分野の音楽と同様年々その水準があがり，アマプロ問わず各地で演奏会が数多く開かれるようになり，あわせてギャルド吹奏楽団の来日などもあって，一般の認識も昔のいわゆる楽隊のイメージよりは，はるかに向上して来たと思います。しかし，吹奏楽がオーケストラとはまたちがったところでひとつの音楽性を築きあげていて，しかもオーケストラと同格に見られているアメリカのようになるにはまだまだ先のことですし，現在はひとつの過渡期にきているわけで，そこに日本の吹奏楽の将来性が期待されると思うのです。私達の新交響吹奏楽団が，その過渡期をのりこえて吹奏楽のひとつのジャンルを築くべく努力したいなどというとひどくあつかましいかもしれませんが，アマチュア故のいろいろな困難はあっても，アマチュアの音楽はここまでという限界はないわけで，週一回の練習を団員全員で心から楽しみつつしかも大きな目標に向って積極的な活動をして行きたいと思います。新交響楽協会の他の二つのオーケストラとともに，私達新響吹奏楽団の果す責任は大きいわけで，本日の演奏曲目も私達新交響吹奏楽団の客演指揮者である村方千之氏の協力で意欲的なプロを組んでみましたが，私達のやらんとしている事のほんの一部でも表現でき，皆様に理解していただけたら幸いに思います。



新交響楽団常任指揮者

芥川也寸志

新交響楽協会の演奏会において頂き，まことに有難うございました。

東京労音の自主サークルであった新交響楽団が，あまりにも政治的な指導に反対して自立し，新交響楽協会を設立してから最初の合同演奏会です。私たちは，みんな音楽の好きな気のいい仲間たちですが，何の社会的発言力も持たず，後だてするものもなく，ただ仲間同士の連帯感と，私ちたを応援して下さる方々の暖い励ましとに支えられて，今日まで練習にはげんで参りました。逆境にあるとき，人は大きな夢を抱くものです。私たちは今，未来にかけての大きな夢をはぐくんでおりますが，それをけっして夢におわらせないで，実現への道を一歩一歩，たとえおそくとも，確かな足どりで歩を進めて行きたいと強く考えております。アマチュアでは初めてという，新交響楽団のベートーヴェン・チクルスもその一つですが，月例定期演奏会に至るまでの私たちの夢の実現を，確実なものにするためにあらためて皆様の御支援と御批判とを，切に切にお願い申しあげる次第です。私たちの熱意のほどを，どうかお汲みとり頂きたいと思います。有難うございました。

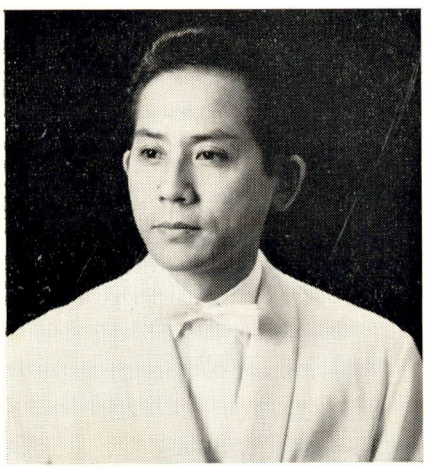
新日本交響楽団常任指揮者

岡田和夫



旧東京労音新交響楽団から新交響楽協会へと，この半年ぐらいのあいだに，ずいぶんいろいろなことを体験しました。この間に味わったさまざまな不快な思いも，もう少し時間がたてば，きっと楽しく語り合うことになるだろうと思います。オーケストラが自立してやっていくことは，なまやさしいことではありせまんし，新交響楽協会にも解決してゆかなければならないことが山ほどありますが，現在ほど生気にみちた状態はかつてなかった，と僕は思っています。もちろん，その生気は，音楽として表現されなくては意味がありません。われわれのオーケストラには，まだ充分な時間，お金，楽器その他足りないものだらけですし，今日の演奏がすべての点でうまくゆくとは思っていませんが，僕は，新交響楽協会の前途は，たいへん明るいと思っています。

昨日よりは今日，今日よりは明日へ，と一歩ずつ前進してゆくために皆さんの声援と，暖かくそして厳しい御批判を寄せて下さるようおねがいいたします。



新交響吹奏楽団客演指揮者

村方千之

27，8年も昔のこと，中学生であった私にとってすべての生甲斐は机の前で勉強することではなく，バイオリンを弾くことでしたが，当時としては大変めずらしかった母校のスクールオーケストラの中で一人前のような顔をして，さっそうと弓を動かしていた時代は，いま考えてみてもまったく罪のない一番たのしい時でした。

聴くことよりも実際に自分も演奏の一員に加わって味わう楽しみはまた体験したものでなくては解らない大きな喜こびがあるものですが，この新響の方達もみなそうした喜こびを求めて集まってこられた方ばかりかと思われます。

今度，私がこのバンドの指揮者としてしばらくの間その喜こびを共にすることになりましたが，私のできる限りの努力を傾けて，たがいにもっともっと高いもの，深いものを音楽のなかに求めて，少しでも良いものを育てることができたらと願っているところです。

常に慈愛のまなざしで

志鳥　栄八郎

ついこのあいだ，ある新聞にオーケストラの記事を２週間ほど連載する仕事があったので，世界のオーケストラの歴史をいろいろと調べてみた。新聞社からの註文は，それぞれの国を代表するとともに，世界の一流の水準にあるものをというので，選定するのにえらく手間どった。なぜかというと，ひとつの団からいくつも選ぶわけにはいかないし，だからといって，その国を代表するたったひとつのオーケストラが，かならずしも世界的水準に達しているとはいえないからである。

わたしは，そのとき，さんざん苦労したあげく，次ぎの12のオーケストラを選んでみた。カッコのなかは，そのオーケストラの発足年代である。歴史の古い順からならべてみるとしよう。

1. ライプチッヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団（1743年・寛保３年）　ドイツ
2. レニングラード・フィルハーモニック交響楽団（1772年，安永元年，ただし，この名称となったのは1917年から）　ソヴィエト
3. パリ音楽院管弦楽団（1828年，文政11年）　フランス
4. ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団（1842年，天保13年）　オーストリア
5. ニューヨーク・フィルハーモニック交響楽団（1842年天保13年）　アメリカ
6. ボストン交響楽団（1881年，明治14年）　アメリカ
7. ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団（1882年，明治15年）　ドイツ
8. アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団（1888年，明治21年）　オランダ
9. チェコ・フィルハーモニー管弦楽団（1896年，明治29年）　チェコ
10. フィラデルフィア管弦楽団（1903年，明治36年）　アメリカ
11. ロンドン交響楽団（1904年，明治37年）　イギリス
12. スイス・ロマンド管弦楽団（1918年，大正７年）　スイス

こういうしだいである。このわたしの選定に，もちろんご不満のかたも多かろうと思う。このほか，アメリカのシカゴ交響楽団も，イギリスのニュー・フィルハーモニア管弦楽団も，フランスのフランス国立放送管弦楽団も，ドイツのバイエルン放送交響楽団も，このなかに加えても決しておかしくないだけの実力を持っているオーケストラだからである。

しかし，それはともかくとして，わたしがわざわざここに12のオーケストラをあげたのは，どのオーケストラがどうのこうのということよりも，その創立年代をご覧いただきたかったからである。いちばん古い歴史を持つライプチッヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団は，いまから，なんと223年も前に呱呱の声をあげている。ということは，大バッハが亡くなる７年前，彼が，このライプチッヒの聖トーマス学院の合唱長をつとめていたころにあたる。このオーケストラが，いかにものすごく古い歴史を持っているかおわかりになるであろう。

パリ音楽院管弦楽団が初めて音を出したとき，ベルリオーズは24才だった。名門ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団が発足したとき，後年，このオーケストラを

“世界一”と讃美したブラームスは，まだ9才の少年であった。ことし，満70才を迎えるチェコ・フィルハーモニー管弦楽団の第1回のコンサートのとき，その記念するべき指揮台に立ったのは，前年にアメリカから帰国したばかりのドヴォルザークであった。あの有名な「新世界交響曲」が作曲されてから3年後のことである。こうしてみると，これらのオーケストラの指揮者や楽員が，自分のオーケストラの伝統というものを，いかに誇りとし，得々と自慢しているかがよくわかるだろう。なにしろいちばん新顔のスイス・ロマンド管弦楽団ですら大正7年（第1次世界大戦の休戦条約が成立した年）の生まれなのだから。

ここでわたしの言いたいのは，ひとつのオーケストラが誕生し，成長し，そして，世界的な水準にまで達するのには，このように，気が遠くなるほどの長年月を必要とするということである。“ローマは一日にしてならず”という格言どおり，“オーケストラも一日にしてならず”なのである。この新交響楽団が，世界の一流になってくれとは，わたしはあえて言わない。しかしこの世のなかがどのように大きく変動しても，音楽に対する燃えるような情熱だけは失って欲しくないと思うのである。

オーケストラというのは，なにしろ世帯が大きいから経営がむずかしい。国家とか市とか，放送局とか大きな財団とか，そういうスポンサーを持っているオーケストラの場合は別だが，そうでないオーケストラは，どこの国のオーケストラもヒイヒイしている。あの天下のベルリン・フィルハーモニーですら，解散寸前の状態にまで追いこまれたことが過去に何回かあったし2度もあの大戦争にまきこまれている。イギリスのニュー・フィルハーモニアにしても，2年前にEMIという大スポンサーが手を引いたために解散せざるを得なくなったが，団員の熱意と大指揮者クレンペラーの協力でただちに再発足した。「ニュー」という名称はそのとき付けられたものである。このように世界に冠たる大オーケストラですら，非惨な現実に何回も直面してきているのである。しかし，そのたびごとに，彼らを支えてきたのは音楽に対する情熱あった。

オーケストラ運動にとって，もうひとつ必要なのは，聴衆の協力である。聴衆というのをもうすこし拡大すれば，そのオーケストラが本拠としている市なり町なりの民衆の協力である。オーケストラというのは，ピアニストとかヴァイオリニストのように，気軽に，ひょいひょいと演奏旅行にとびまわるわけにはいかない。結局，そのオーケストラが誕生し，現に成長しつつあるその市なり町なりが，そのオーケストラにとって最も大きな活躍の舞台となるわけである。だからオーケストラは，その市民のために，いつも最上の演奏を行なわなければならないし，また市民も，そのオーケストラの成長を常に慈愛のまなざしで見つめ，なにかと力を貸してやらなければいけないわけである。

今夜こうして来会くださったみなさんは，これから茨の道を歩まなければならないこの新交響楽団，新日本交響楽団，新交響吹奏楽団の，良き担い手となってやって欲しいのである。

（音楽評論家）

組曲「我団」

安盛春雄

前奏曲

白い上衣を着て，上手でもないのに一人前の顔してステージの上にのっている私達の楽団，「新交響吹奏楽団」。とても全世界に知れ渡るには先の長い話ですが，僕は信じています，明日にもこの楽団が有名になる事を，なぜかと云えば……

酒飲賛歌

昨年の夏，ある土曜日の午後，演奏旅行と合宿を組合せて浅草を出発した団員。皆電車の中を練習場のごとく騒ぎ廻っている間に，演奏会場に到着し，その夜の演奏も無事終えて，あわただしく合宿の日光に向う為バスに乗った。いつの間にか，どこからともなく，アルコールが廻って，正常であるのに苦痛を感じ出した団員が続出した。……イロハ坂をのぼって湖畔の宿に着いた時，普段の紳士も面目無し。我団員も，ステージに乗っているとなんとなく気品があるんだけど，やっぱり皆さん，泥臭い人間です。

行進曲

その合宿も終りの日，正午をきして宿を追放された我団員，三々五々と散っていったけど，戦場ケ原を見学に行った十数名の一団の話。

バスを降りて湿地帯を歩いたけど物足りなくて，奥日光に続く道を湯の湖に向ってゾロゾロ歩き出した。若い男女，そして上天気，そのうえ皆が音楽好き゛それに吹奏楽とくれば，……そうです行進曲が歌声となって出て来ました。誰がいうのでもなく足がそろって，二列なったり，三列になったり，およそ小一時間，東京ではこんな事は出来ませんな。我団員案外子供です。

五十名も団員がいると遠くから来ている人がいます。大船，市川，狭山，与野。今年の五月のある日曜，運動会の進行をかねて演奏に出かけた。昨夜の大雨にもかかわらず，朝七時半の集合に早くも二十人。そのうちぞろぞろと集って来た。毎日八時半の出社に生活をかけている我団員であるがこの日には，……うれしいですねエー。この日だけではありません。練習会場の都合で日曜の朝の練習になった時も，九時半にはほとんど全員の顔がそろっていた。このファイトです。我吹奏楽団が上達する事確実です。

終 曲

色々勝手に書いたけど，実は我団，設立以来五年をかえりみて，ほとんどうまくなっていない。「現実のきびしさ」の見本そのままが我団であり。「アマチュアはやっぱりアマチュアだ」と云われる所以である。

だけど全団員が上手になろうとしているし，音楽を楽しもうとしています。この努力が，アマチュアの理想を求めて週一回の練習をしている我団を向上させる力となり，いつの日にか，新交響次奏楽団を有名にしてくれると僕は信じています。

アンコール

今夜の白い上衣は借物です。

私の音楽歴

前田富士子

ヴァイオリンを——なぜ？

期末試験も終り，ホッとしてラジオのスイッチをひねると，流れ聞えきたのがチャイコフスキーのヴァイオリンコンチェルト。何となく聞いているうちに非常に感動してきたことに気がつきました。それが何かはわかりません。ただ，ただ非常に感激していることは事実でした。そのすばらしい感動。どうしても，ヴァイオリンをやろう！間もなくある銀行へ就職し，金弐千五百円の鈴木ヴァイオリンと教則本を買い求め，キーキーやりはじめます。ところがたった四本の糸と一本の弓と思ったのですがこれを操るには自己流ではとても手に負えない事がわかり，十九の年，レッスンへ通い出し小さな子供と一緒になってほんの初歩からやりはじめました。小さな子は先生の注意に指や腕はやわらかく自由に動くのに，私の指や腕ときたら，骨はかたくかたまって意識すればする程動かない状態。汗びっしょりになりながら泣きたくなることレッスンの度ごとでした。骨がかたまってから始めた方は小さな時に始めた方より二倍以上の練習が必要ですよ」先生に言われ，銀行が終ると飛んで帰り近所に気を使いながらキーキーギコギコ。左手の指先は細い弦の為に血がにじみ一時は手袋をはめての練習。必死でした。しかし苦しめば苦しんだ以上にその喜びは大きく自分自身に返ってきました。教則本が一巻一巻と進ん

で行くうちにヴァイオリンというもの，音楽というものの純粋さ，底知れない深さにぐんぐんひかれていきました。

すばらしい仲間

ヴァイオリンを手にしてから二年，ある日アマチュアのオーケストラがあることを知り，楽器をかかえて見学に出かけてみました。七・八十名が写真でしか見たこともない楽器等を自由に吹いたりしてすばらしいダイナミックな音を出しているではありませんか。その場の熱気におされて自分の楽器歴も忘れ入団手続きをとってしまいました。聞くところヴァイオリン歴十年以上という方が大部分。あわてました。おまけに練習している曲が忘れもしません，ベートーヴェンの「運命」終楽章です。オーケストラは初めてという私には「運命」はもちろん終楽章には大きなショックでした。「オーケストラは慣れですよ，すぐ弾ける様になりますよ」なんて言う団員のなぐさめの言葉と，音楽するすばらしさに目をみはり，なんとかついて来て五年が経ってしまいました。

音楽と生活

人前で演奏すれば弓がふるえて音にならなかった時を経て，今，音楽する悦びが日常生活の中にとけ込み，美しいハーモニーを奏しています。社会へ出てからのものの考え方，自身の向上，美しい人間の心と心のふれあい，あらゆる職業を持った方が仕事を終ると同時に楽器をたずさえて集まり，仕事の疲れも忘れ心を合せて一つの音楽に向って全力を傾ける。

ともすれば惰性的になりやすい一日一日が，一つのものを創り出す苦しみ，喜びによってどれ程，充実した時を過せたか。かつてチャイコフスキーに感激した新鮮さを忘れず，音楽を心に感じて意義ある日々を送って行きたいと思います。

「オーケストラの中で」

中　村　一　郎

私がオーケストラをやり始めてから10余年になります。最初はただなんとなく好きで始めたものが，だんだんといろいろな曲を練習したり，演奏したりするに従って，気が向いたときに，好きなだけやると云う勝手気ままな気持では，とてもやれるものではないと理解するようになり，単に音楽が好きであるから，又，何となくオーケストラが楽しいからやるという時期は，もうとっくに過ぎ去ってしまいました。

もちろん，音楽ないしはオーケストラの楽しみ方には様々な方法があり，どれが正しく，どれが正しくないかを，一概に断言することは出来ないが，音楽というものは，一生懸命追求すればする程，それが私達に示す反応は，益々味わい深いものとなることは，疑いのない事実です。しかしながら，自分達だけで，音楽することを楽しんでいる場合には，自分達が楽しければそれでもよいが，演奏会の場合の如く，聴衆を対称とするときに於いては，自分達が演奏して楽しいか，楽しくないかは別として，少くとも聴衆に対しては，音楽的な意味に於いての満足感を与えることが出来るのでなければ，音楽としての価値はありません。もし，それがないとすれば，音楽を演奏することは，演奏者の自己満足に過ぎないものとなってしまいます。単に自分たちだけの楽しみのために音楽を演奏することや演奏会を開くことに意義があるとするのは，あまりにも浅さはかな考えと云うべきでありましょう。

アマチュアの場合に於いても，オーケストラが健全な姿で存続するためには，単に指揮者と一通りのメンバーや楽器が揃っているだけでなく，チームワークないしはアンサンブルが良いこと，効果的な練習方法と演奏技術の習得，経済的独立性の確保，そして加うるに，これを支える少なくない聴衆が存在すること等が必須条件であり，これらの一つでも欠けるようなことでもあれば，オーケストラの発展にとって致命的なものになってしまいます。オーケストラというものは，これら諸々の条件が綜合された上に成立するものであり，それぞれの条件が有機的なつながりを持っていると云えます。

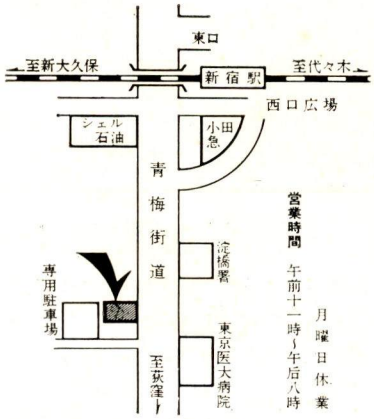
現在の私達のオーケストラに於いても内在する問題は非常に多く，乏しい練習時間や演奏技術の貧しさ等の悪条件に満ちております。しかし，私達はこれらを一つづつ解決していかなければなりません。今，私達に与えられている課題は，このような条件の中で，如何にして音楽に対する愛を≪持続≫するかということのようです。

◎フルートの村松が、管楽器・打楽器の専門
店として新宿に開店しました

村松フルート

各国一流管楽器・打楽器

管楽器・打楽器の各種楽譜



村松楽器販売株式会社

東京都新宿区柏木1—137

TEL 369—6660・6589